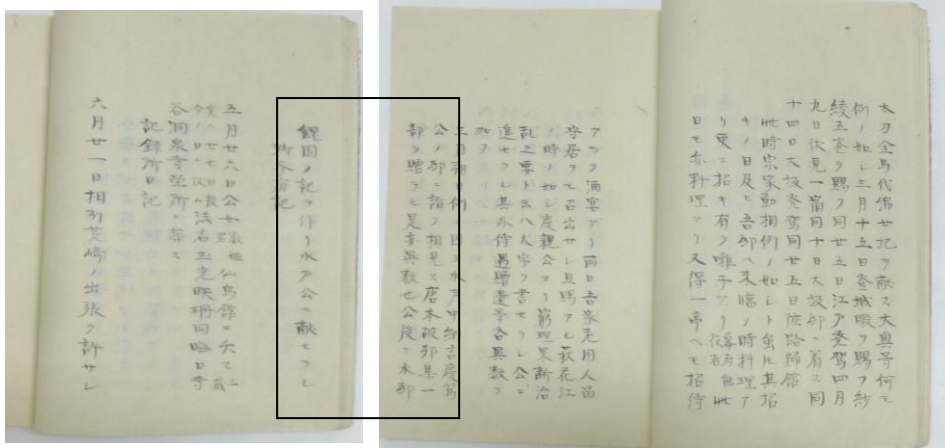


歴史エッセイ

経幹 後楽園に招待される

安政五年(一八五八)三月、吉川経幹は江戸参府中に水戸藩主・徳川斉昭に招かれ後楽園(水戸藩の江戸上屋敷)を訪ねました。吉川家譜にもその事がしるされています。



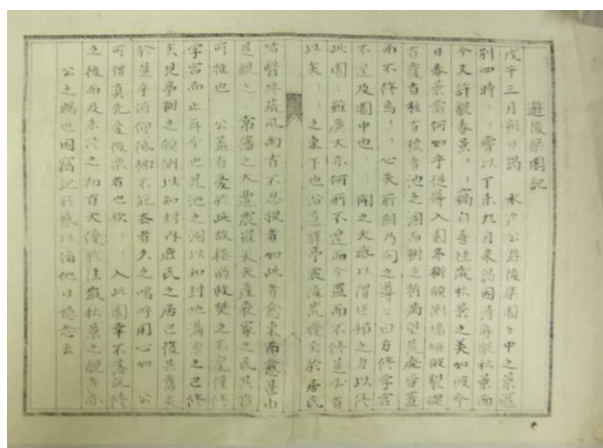
この日のことを経幹は漢詩にし「習静楼遺稿」に水戸の江戸藩邸(後楽園)に招かれた時の漢詩が納められています。

遊後楽園記

戊午三月朔日、謁水戸公、遊後楽園記園中之景、區愈甚、由是觀之、常藩三十五萬石、遭震罹災喪家失産之民、其夥可推也、公恙有憂於此、故極救焚之不遑、僅修学宮而止耳、今也見池之涸、以知封地溝澮之已修矣、見亭榭之傾側、以知封内庶民之居已復舊矣、於是乎俯仰低徊不能忘者久之、嗚呼如公、憂民如公、可謂真後樂者也歟、経幹入此園、幸不落既修之後、而及未修之初、有天優於往歲秋景之觀者、亦公之賜也、因竊記所感、以備他日憶念云、輒罷散日俟再議、已而復然、其用人、必無鋒軟熟易制者、日恐生事、方今天下滔滔、姦吏乘時、假公濟私、榮利、事奢靡、輕薄之風、無所不至、是以慷慨之士、或寄身煙霞泉石、或求侶魚蝦麋鹿、而為人主者、生于重屋之中、成長夫人女子手、菽糝不分、不留心于政事、餓羸轉途後宮歌舞之聲不絶、詩不云乎、蒹葭蒼蒼白露為霜、易不云乎、履霜堅冰至、嗚呼末俗之弊、彼此如一、可不恐懼乎、明公以為如何、幹竊考習弊所由、其來遠矣、西土此、蒙昧不明、無毫益于民、每聽愁訴、未嘗不汗背也、雖然科挙之汰、幹豈欲行之於此乎、亦但欲破門地拔俊傑、以君之明通民之情、使

有国脉延長以補天職百分之一、聊陳胸懷以呈、政暇覽觀、區區之量幸亮察焉、幹謹再拜白

内容は難しいのですが、簡単にいえば経幹は徳川斉昭の政治姿勢に感銘を受けたというのでしょうか。また、下書きも残されており、詩を作るのに思案していた形跡がみえます。



(原田史子)

編集後記

今年の四月、幕末の史料をまとめた卷子三十二巻『明治追加』が岩国市の指定文化財になりました。五百通あまりの文書群です。全文書は、岩国市が撮影し、データを頂いています。

刊行されていないので、少しずつ積文をしています。難解なので、時間がかかりそうです。



お知らせ  
ホームページをリニューアルしました。  
(原)

<https://www.kikkawa7.or.jp>

吉川史料館  
〒741-0081  
山口県岩国市横山二丁目七-三  
TEL ○八二七-四一-一〇一〇  
FAX ○八二七-四一-三三〇〇